

ヨエル書とラオデキア的なセブンスデー・アドベ ンチスト教会 - 第20

Jeff Pippenger

2025-12-26

二十番

ヨエル書は、神のぶどう畑の破壊が第四世代に起こることを明らかにしている。

ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。

これを聞け、長老たちよ、地のすべての住民よ、耳を傾けよ。これがあなたがたの日に、いや、あなたがたの父祖の日に起こったことがあるか。これをあなたがたの子どもたちに語れ。あなたがたの子どもたちにはその子どもたちに語らせ、その子どもたちにはさらに次の代に語らせよ。

毛虫が食い残したものは、いなごが食べ、いなごが食い残したものは、尺取虫が食べ、尺取虫が食い残したものは、芋虫が食べた。

酔いどれどもよ、目を覚ませ、泣け。ぶどう酒を飲む者は皆、泣き叫べ。新しいぶどう酒のために、それがあなたがたの口から断たれたからだ。ヨエル書 1:1-5。

十人の乙女のたとえはアドベント主義のたとえであり、そのたとえにおける目覚めは、麦と毒麦が分けられる時に起こる。その時点で、毒麦は、自分たちが「新しいぶどう酒」から「断ち切られた」という事実を目覚める。「断ち切る」という語は、アブラムの契約の第一歩を表しており、そこでは雌の子牛、雌やぎ、雄羊が、血によって契約を確証する儀式において二つに切り分けられた。まさにその同じ契約の箇所、神は、第四代に裁きのうちにご自分の民を訪れることを明らかにしておられる。

彼はアブラムに言った。「確かに知っておけ。あなたの子孫は自分たちのものではない地で寄留者となり、その民に仕え、そしてその民は四百年のあいだ彼らを苦しめる。だが、彼らが仕えるその国をも、わたしは裁く。そののち、彼らは多くの富を携えて出て来るであろう。あなたは平安のうちに先祖のもとに帰り、よい老年に達して葬られる。だが四代目に、彼らは再びここへ帰って来る。アモリ人の不義は、まだ満ちていないからである。」創世記 15:13-16

その預言が第四代、すなわちモーセの時代に成就したとき、主はご自身とその選ばれた民との契約のしるしとして十戒をお与えになった。その十戒の第二において、アブラムの四代の光は輝きを増した。

あなたは自分のために、いかなる刻んだ像も、また天にあるもの、地にあるもの、地の下の水の中にあるもののいかなる形に似せたものも、造ってはならない。あなたはそれらにひれ伏してはならず、仕えてはならない。主、あなたの神である私は、ねたむ神だからである。私を憎む者には、その父祖の咎を子らに、三代、四代に至るまで及ぼし、私を愛し、私の戒めを守る者には、幾千人にまで慈しみを施す。出エジプト記 20:4-6。

アブラムの契約における四代という枠組みは、神がねたむ神であるという御性質を大きく示す文脈に組み込まれていた。そのねたみは刻んだ像と対比される。アブラムの第四世代においては、段階的な裁きも見いだされる。その裁きは、神の民が奴隷状態に置かれていた国にも神の民自身にも下り、その後にアモリ人が裁かれることになっていた。アブラムは、裁きの過程が神の家から始まり、世界へと段階的に広がっていくことを示しており、第二の戒めは、その裁きの過程が人類を神を憎む者の群と神を愛する者の群に分けることを明らかにしている。こうしてそれは、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、わたしの戒めを守りなさい」と叫ぶ日曜法を予表している。

律法がシナイ山で授けられているのと同じ時期に、神のご性質がモーセに示される。

主はモーセに仰せになった。「最初のもののように、石の板を二枚、自分のために切り出しなさい。あなたが打ち砕いた最初の板にあった言葉を、わたしがそれらの板に書き記す。明日の朝、備えをして、シナイ山に上り、山の頂でわたしの前に出なさい。だれもあなたと共に上ってはならない。山全体にわたって人が見られてはならない。羊の群れも牛の群れも、その山の前で草を食べさせてはならない。」

彼は最初のものと同じように石の二枚の板を削り出し、モーセは朝早く起き、主が彼に命じられたとおりにシナイ山に上り、手にその二枚の石の板を携えた。主は雲のうちに降りて来て、そこで彼と共に立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎ、宣言された。

主、主なる神は、あわれみ深く、恵み深く、忍耐強く、いつくしみとまことに富み、千代にまでいつくしみを保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罪ある者を決して無罪とはせず、父の咎を子に、孫に、三代、四代にまで及ぼす。

モーセは急いで地にひれ伏し、礼拝した。彼は言った、「主よ、もし今、私あなたがあなたの御前に恵みを得ているなら、どうか、わが主が私たちのただ中においてくださいますように。というのは、この民はうなじのこわい民だからです。どうか私たちの不義と罪を赦し、私たちをあなたの嗣業としてお取りください。」出エジプト記 34:1-9。

律法の再授与は、1850年の先駆者図表と符合する。最初の石の板は打ち砕かれ、また最初の図表には数値の誤りがあった。古代イスラエルは律法の保管者とされ、現代のイスラエルは神の律法と神の預言的な御言葉の律法の保管者とされた。二枚の石の板が最初に示されたとき、宿営の中には文字どおりの反逆があり、1850年の図表が示されたときには、宿営の中で霊的な反逆がくすぶっていた。アブラムの第四世代に関する預言は、モーセによって第四世代において成就し、第二戒において神は第四代に及ぶさばきの啓示を拡大された。刻んだ像は神への真の礼拝の偽物となり、神の御性質であるねたみがそのさばきに結び付けられた。ついでモーセは神の栄光を仰ぎ見た。彼は、「御名」によって表される神の御性質の一要素として神のねたみを見、礼拝者とその父祖の罪との関係が示された。

キリストが最初に宮を清められたとき、弟子たちは、彼の家への熱心が彼を食い尽くしたことを思い起こした。「熱心」とは「ねたみ」を意味する語である。そのねたみを表す神のご性質こそが、キリストにご自分の宮を清めさせた動機であり、また父祖の罪を告白する必要という預言的な特質は、のちにレビ記二十六章の「七倍」の裁きにおける悔

い改めへの呼びかけの不可欠な要素となる。アブラムの「第四代」は、契約史が進むにつれて、ますます重みを増していく。ヨエル書は、終わりの日に起こる「後の雨」の時を表している。ヨエル書は、冒頭で四代のメッセージを掲げ、その主題の上にメッセージを打ち立てているが、これはアブラムが神と結んだ三重の契約の最初の段階で記録された主題である。その主題はヨエル書において結論に達する。

約束の地に入ると、契約の箱はシロに安置された。そこでは、邪悪で愚かな大祭司エリとその墮落した二人の息子が、サムエルの召しと対比される。シロは、契約のしるしであるその箱の旅路の一段階となった。契約の箱がエリコの城壁を打ち倒す象徴として用いられた後、エリとその邪悪な息子たちの死に至るまで、およそ四百年間シロに置かれていた。その後、ペリシテ人に奪われ、のちにダビデがその箱をエルサレムに運んだとき、エルサレムへの凱旋入城の最初の実例が示された。契約のしるしをエルサレムに移したと述べられた目的は、神がご自身の名をエルサレムに置くことを選ばれたということであり、その御名は神の妬みと結びついており、その妬みは第四代に及ぶ妬みの裁きと結びついている。

日曜法の時に、主は勝利の教会をすべての丘や山々の上に高く掲げ、異邦人は「さあ、神の家に行こう」と言う。

終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ登ろう。主はその道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう。律法はシオンから出、主のことばはエルサレムから出るからだ。」イザヤ書 2:2, 3.

主のことばはエルサレムから出て行く。なぜなら、そこは、主が自らの『名』を置くことを選んだ場所だからである。モーセの時には、「主は雲の中に降り、そこで彼と共に立ち、主の名を告げた。主は彼の前を通り過ぎ、告げた、」

主、主なる神は、あわれみ深く恵み深く、怒るのに遅く、慈しみとまことに富み、慈しみを千代にわたって保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罪ある者を決して無罪とはしない。父祖の咎を子らに、また子らの子らに、三代、四代にまで及ぼす。出エジプト記 34章6、7節。

神の「御名」は神の品性であり、神の品性はきわめて深く複雑で、しかもきわめて単純である。「神は愛である」という言葉は、神の品性を完全に、しかし簡潔に表している。アブラムの契約における「第四代の裁き」という真理は、第二戒が第四代について与えたさらなる光によって、「少しずつ積み重ねられて」拡張された。そしてモーセの経験は、神の「ねたみ」の光を加えることによって、第四代と神の品性との結びつきに関する光をさらに広げた。靈感は品性を「思いと感情の結合」と定義しているが、同時に、私たちの思いは神の思いとは異なることも教えている。神の品性は神の思いと感情の結合であり、神の品性には私たちの単純な人間の思いや感情をはるかに超える多くの側面があるので、その違いは、天が地より高いように神の思いが高い、ということに等しい。

わたしの思いはあなたがたの思いとは異なり、あなたがたの道はわたしの道ではない、と主は言われる。天が地よりも高いように、わたしの道はあなたがたの道よりも高く、わたしの思いはあなたがたの思いよりも高い。イザヤ書 55:8, 9.

さて、熟考すべき人間の思いを一つ。もし神の御性質がその御名によって表されるのだとすれば、神の御名のあらゆる顕れはその御性質の顕れでもある。ユダ族の獅子はその預言の御言葉を封じ、また封印を解き、パルモニは秘密の数を定める不思議な方であり、その方はまた乾いた地から出る根でもあり、さらに燃える柴、火の柱、大天使ミカエル等々。神のさまざまな御名によって示される神の御性質の属性は尽きることがない。「熟考すべき人間の思い」とはこうである。既に知られている神の御性質のさまざまな表現がある中で、アブラムとの三段階の契約過程における最初の段階で、その御名を反映する契約における基礎的な宣言が「第四世代の裁き」であるということには、どのような意義があるのか。

彼はアブラムに言った。「確かに知っておけ。あなたの子孫は自分たちのものではない地で寄留者となり、その民に仕え、そしてその民は四百年のあいだ彼らを苦しめる。だが、彼らが仕えるその国をも、わたしは裁く。そののち、彼らは多くの富を携えて出て来るであろう。あなたは平安のうちに先祖のもとに帰り、よい老年に達して葬られる。だが四代目に、彼らは再びここへ帰って来る。アモリ人の不義は、まだ満ちていないからである。」創世記 15:13-16

人と国々を裁く方としての神の御性質は、人に、四世代に象徴される猶予期間を与える。神は裁き主であり、憐れみ深く、忍耐強く、そして人と国々に対する裁きを第四世代において完結させる。神が選ばれた民と結ぶ契約における根本的な宣言には、第四世代の裁きが含まれている。第一の天使のメッセージが、三人の天使それぞれのメッセージのすべての特質を備えているのと同様に、アブラムの契約の第一の段階も、三重の契約全体の特質を備えている。神の御名は、第四世代において裁きを行う憐れみ深い裁き主であるということだ。選ばれた民の契約史におけるそのほかのすべての段階は、その土台の上に築かれていく。

ヨエル書が第5節の「真夜中の叫び」の覚醒に位置づけられ、しかも「新しいぶどう酒」が彼らの口から「断ち切られる」とき、選ばれた契約の民が最終的に契約において分離されることへの序章は、第四世代に成就するものとして、のちに「断ち切られる」契約の民の反逆を示す契約の基礎的メッセージとなる。彼らはその契約の基礎的メッセージを理解しないがゆえに、「断ち切られる」のだ。

創世記15章の四つの節に記された契約の礎となるメッセージは、終わりの日に契約の頂点のメッセージが「新しいぶどう酒」として提示されるときに用いられる、測り竿-裁きの基準線である。「新しいぶどう酒」が「断たれる」ときにエフライムの酔いどれたちが目覚めることに伴う重大さは、後の雨の試しの期間における反逆的な選民の最後の第四世代に対する裁きの宣告という文脈に置かれて初めて、真に理解される。

創世記17章には、アブラムとの三重の契約の第二段階が記されています：

神はアブラムに言われた。「それゆえ、あなたとあなたの後の子孫は代々、わたしの契約を守りなさい。これは、あなたがたが守るべき、わたしとあなたおよびあなたの後の子孫との間のわたしの契約である。」

あなたがたのうちの男子は皆、割礼を受けなければならない。あなたがたは包皮の肉に割礼を施し、それは私とあなたがたとの間の契約のしるしとなる。生後八日の者は

、あなたがたのうちで割礼を受けなければならない。代々にわたって、家で生まれた者も、あなたの血筋ではない異国人から金で買い取られた者も、すべての男子はそうしなければならない。あなたの家で生まれた者も、あなたの金で買い取られた者も、必ず割礼を受けなければならない。こうして私の契約は、あなたがたの身において永遠の契約となる。もし包皮の肉に割礼を受けていない男子がいれば、その者は民の中から断たれる。彼は私の契約を破ったからである。創世記 17:9-14。

第二の段階は、「断たれる」という象徴に対する第二の証しを与える。「断たれる」と訳される語は、第十五章でアブラムが動物を二つに切り分けたことに由来しており、また、その箇所では、割礼を受けない者は契約から「断たれる」とされている。キリストがまさにこれらの真理を確証しておられた契約史においては、割礼は洗礼に置き換えられた。そしてこのゆえに、私たちの模範である彼は第八日に復活された。

そのしるしは、箱舟の中の八人によって象徴されているように、八日目に行われるべきものだった。第二の段階では視覚的な試験が示される。すなわち、エリヤが行った裁きに先立って、イスラエルがイゼベルの預言者たちとエリヤのどちらに従うかを選んだこと、または、ダニエル、シャデラク、メシャク、アベデネゴの容貌が王の食物を食べた者たちよりも美しくふくよかに見えたことである。第二の試験は視覚的なものだ。割礼は命のしるしであり、箱舟に乗っていた八人は、死んだ者たちとは対照的に生きた者たちを表している。

キリストの歴史において、契約のしるしが洗礼へと移行したとき、使徒パウロは、契約の歴史における大きな転換を示すために、まさにこれらの節に記された契約の歴史を用いた。彼は、割礼において切り捨てられる肉を、神性との関係における人間の象徴として、また、人間の高次の本性に対する低次の本性の象徴として用いた。パウロは神の預言のことばを用いて弟子たちを教え、また（彼の名サウロが意味するように）「選ばれた者」としての彼の目的は、神の契約の民としてのイスラエルが文字通りのイスラエルから霊的イスラエルへ移行することによって表される、契約の歴史における大きな転換を明らかにすることだった。彼は与えられた務めを果たすにあたり、契約の歴史の文脈においてその預言的メッセージを提示した。

創世記17章は、三つの基礎的な契約の段階の第二段階を表しており、そのオメガの成就是黙示録14章の三人の天使において見いだされる。第二段階は割礼のしるしによって示され、これは十四万四千人に押される神の封印を予表している。彼らは旗印であり、それは目に見える試金石を表す。三人の天使は、アブラハムのアルファの契約のオメガである。アブラハムにとっての第三段階は創世記22章であった。

そして主の使いは、二度目に天からアブラハムを呼び、こう言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこのことを行い、あなたの子、あなたの独り子を惜しまなかつたので、わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を天の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の城門を手中に収める。あなたの子孫によって地のすべての国々は祝福を受ける。あなたがわたしの声に従ったからである。」創世記 22:15-18。

この章の第一節は、こう述べている。「これらの事の後、神はアブラハムを試み、彼に仰せられた、『アブラハムよ』。彼は答えた、『はい、わたしはここにおります』。」神がアブラハムを試みられたことは、第三の契約の宣言に先立つ最後の試練を示している。アブラハムがその試練を通過したとき、アブラハムの三重の契約の最後の四節が示された。神の声、すなわちこの箇所における神の「契約の声」にアブラハムが「従った」ゆえに、アブラハムは諸国民の父として祝福されるのである。第三の天使は試練であり、アブラハムのように品性を明らかにする試練を表している。そして品性は、アブラハムがそうであったように神を信じるか否かに基づく。アブラハムのようにその試練を通過する者たちは、世界のすべての国々を集め入れるために用いられる。三つの章にわたる十七節は、神と選ばれた民との契約を明らかにしている。そしてそうすることによって、それらは選ばれた民の契約史のアルファを表し、同時に、十四万四千人の興起によって表される契約史のオメガも表している。

契約の条件をあらかじめ確認することもなく、家や車を買う者が私たちの中にどれほどいるだろうか。ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチストのうち、自分たちの神との契約の第一条が、神ご自身が「第四代に裁きを下されるあわれみ深い神」であると示しておられることから成っていると知っている者はどれほどいるだろうか。悲劇なのは、彼らがミラライトの歴史の根本的な真理を知らず、また自らが公言する契約関係の根本的な真理も知らないことであり、そのため彼らは古代イスラエルと同じく、自分たちの訪れの時を知らないということである。その訪れの期間は9/11に始まり、その結末において、彼らは真夜中に目を覚まされて初めて、自分たちが断たれていることに気づくのである。

続きは次回の記事でお届けします。

4月18日、倒壊していく建物の光景を目の当たりにしてから二日後、私はロサンゼルスカー・ストリート教会での約束を果たしに行った。教会に近づくと、新聞売りの少年たちが「サンフランシスコ、地震で壊滅！」と叫んでいるのが聞こえた。私は重い気持ちで、その恐ろしい災害について大急ぎで刷られた最初のニュースを読んだ。

二週間後、帰途にサンフランシスコを経由し、馬車を雇って、その偉大な都市にもたらされた破壊の跡を一時間半かけて見て回った。災害に対して安全だと見なされていた建物でさえ、廃墟と化していた。ところによっては、建物が半ば地面に沈み込んでいた。その都市は、耐火・耐震の構造物を築くうえで人間の知恵の力不足を、実に凄惨な姿で示していた。

主はその預言者ゼパニヤを通して、悪を行う者にもたらず裁きを次のように告げられた。「わたしは地の面からすべてのものをことごとく滅ぼし尽くす、と主は言われる。わたしは人も獣も滅ぼし、天の鳥も海の魚も、悪者とともにつまずかせるものも滅ぼす。わたしは人を地の面から断ち滅ぼす、と主は言われる。」

主のいけにえの日に、わたしは首長たちと王の子ら、そして異国風の衣服を身に着けているすべての者を罰する。その同じ日にも、敷居を飛び越え、自分の主人の家を暴虐と欺きで満たすすべての者を、わたしは罰する……

「その時、私は灯火をもってエルサレムを探し出し、澗の上に安んじ、心の中で『主は良いこともせず、悪いこともしない』と言う者たちを罰する。ゆえに、彼らの財産

は略奪物となり、家々は荒れ果てる。彼らは家を建てても住むことはなく、ぶどう畑を植えても、その酒を飲むことはない。」

「主の大いなる日は近い。まことに近く、非常な速さで迫っている。主の大いなる日の声がする。そこでは勇士でさえ激しく叫ぶ。その日は憤りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と荒れ果ての日、暗闇と陰鬱の日、雲と濃い暗闇の日、城壁のある町々と高いやぐらに向けてラッパが鳴り、警報が鳴り響く日である。わたしは人々に苦難を臨ませ、彼らを盲人のようによろめき歩かせる。彼らが主に罪を犯したからだ。彼らの血は塵のようにまき散らされ、彼らの肉は糞のように投げ捨てられる。主の怒りの日には、彼らの銀も金も彼らを救い出すことはできない。むしろ、全地はそのねたみの火に食い尽くされる。主は、この地に住む者すべてを速やかに断ち滅ぼすからである。」ゼパニヤ 1:2、3、8-18.

神はもはや長くは忍耐されない。すでにいくつかの地に御裁きが下り始めており、やがてその激しい御怒りが他の地にも及ぶだろう。

神が事態を主宰しておられることを明らかにする一連の出来事が起こるだろう。真理は明快で紛れもない言葉で宣べ伝えられる。私たちは民として、聖霊の主権的な導きの下に主の道を備えなければならない。福音はその純粋さのままに伝えられるべきである。いのちの水の流れは、その流路において深まり、広がっていく。近くでも遠くでも、あらゆる地で、人々は鋤から、また人の思いを大いに占めている日常的な商業や事業の職から召し出され、経験ある人々と共に教育を受けるだろう。効果的に働くことを学ぶにつれて、彼らは力をもって真理を宣べ伝えるようになる。神の摂理の最も驚くべき御業によって、困難の山は取り除かれ、海に投げ込まれる。地に住む者にとって大いなる意味を持つそのメッセージは、聞かれ、理解される。人々は何が真理であるかを知るようになる。業は前へ、さらに前へと進み、全地が警告を受けるまで続き、そのとき終わりが来る。

日を追うごとに、神の裁きがこの世に下っていることが、いよいよ明らかになっている。火と洪水と地震によって、神はご自身の近い到来をこの地の住民に警告しておられる。世界の歴史における大危機が到来し、神の統治のあらゆる動きが、強い関心と表現しがたい不安をもって注視される時が近づいている。神の裁きは矢継ぎ早に相次ぎ、火と洪水と地震、さらに戦争と流血が続くであろう。

ああ、人々が自分たちの顧みられる時を知ることができたなら！ この時の試金石となる真理をまだ聞いたことのない人が多くいる。神の御霊が働きかけておられる人々も多い。神の滅びをもたらす裁きの時は、何が真理であるかを学ぶ機会を持たなかった者たちにとってのあわれみの時である。主は彼らを優しく顧みられる。主のあわれみの心は動かされ、救うための御手はなお差し伸べられている。一方、入ろうとしなかった者たちには戸が閉ざされている。

「神のあわれみは、その長い忍耐のうちに示されている。神はご自分の裁きを猶予し、警告のメッセージがすべての人に響き渡るのを待っておられる。ああ、もし私たちの民が、世界に最後のあわれみのメッセージを伝えるという自分たちに課せられている責任を、あるべきように自覚するなら、なんとすばらしい働きがなされることでしょう！」証言 第9巻、94-97ページ。